長崎大学のいま！
第2回

これから長崎大学を目指す高校生に、一般的な大学案内ではなかなか伝えられない、各学部の現在のようすや最前線のトピックスを紹介するシリーズ。前号の工学部・教育学部に続き、今回は経済学部の登場です。

長崎大学のいま！ 経済学部

グローバル・ビジネス人材を育てたい

岡田裕正
経済学部長

おかだひろまさ
長崎大学経済学部教授。一九八八年九州大学経済学研究科博士後期課程単位取得満期退学。一九八九年四月に長崎大学経済学部に講師として着任。二〇一一年四月から現職。専門は財務会計論。

世界の大学と交流協定 留学先で自分を磨く

「その人たちは仲間になるかもしれない。あるいは交渉相手になるかもしれないし、ライバルになるかもしれない」――留学先で出会う同世代の若者たちは、将来そうなるかもしれない。経済学部では、これまでの学生の海外への派遣の取り組みを基に作成した教育プログラムが文部科学省の事業に採択されました。経済学部のグローバル戦略は、「GSR」というキーワードで語られます。岡田裕正経済学部長にお話をお聞きしました。

「GSRとは、Global Social Responsibilityの略です。例えば、環境問題には国境はないですね。その解決をするとき、当事者となる国々にはさまざまな価値観の相違があるでしょう。その価値観の相違を越えた、相互に理解できるような解決策を導き出すような志を、私たちはGSRと考えています。そんな志と意欲を持った経済人にとって、相手の価値観の違いを知ることは大切でしょう。そのような人材を育成するとき、海外留学はかなり有効です。ともに学び、直接一対一で言葉をかわす。人柄を理解し合いながら、最終的には信頼関係を築いていく過程を体験できます。いわゆる観光旅行とは明らかに違う、地に足のついた学びの場としてキャリア全体を考えるきっかけとなっているのです」。

経済学部では、かなり以前から海外の大学との交流協定を築いているそうですね。

「はい、タイのチェンマイ大学との交流は平成十年に始まり、毎年一～二名の学生を半年から一年派遣していましたし、中国の上海財経大学会計学院には毎年夏休みを利用して十名程度の学生を派遣し、現地での成績評価を基に本学部で単位認定をするシステムを作っています。また、韓国の中央大学校、中国の西南財経大学、米国のカリフォルニア州立大学など、これまで交流している大学との交流協定の締結を手始めに十五程度の大学との交流協定を目標として、学生の留学先の開拓を継続しています。一週間程度の短期でも海外に行けば学生はガラリと変わります。何しろ経済や経営の英語での授業はハードですし、コミュニケーションツールとしての英語力の必要性も痛感する。また、学生交流では、何より将来の仲間や競争相手になるであろう同じ世代の若者が、政治や経済の話をガンガンぶつけてきます。視点の違いにも気づいて、ずいぶん刺激になるようです」。

国際イベントと瓊林（けいりん）会のバックアップ

大学院経済学研究科が主催の国際カンファレンスもあると聞きました。

「アジア金融市場国際カンファレンスですね。毎年行っており、昨年十二月は九回目を福岡アクロスで行ったばかりです。世界の第一線で活躍するファイナンス分野の研究者、それも日本、中国や韓国だけでなく、年によって変わりますが、台湾、アメリカ、カナダ、イギリス、フランスなどの研究者が参加し、研究報告と議論を展開するものです。昨年はイタリアからの参加者もいました。そこで院生が英語でプレゼンテーションすることもあります。このほか単発でのカンファレンスもたびたび行うこともあります」。

また、経済学部の場合、前身が商業高等学校という伝統があります。アサヒビールやNHKの会長を歴任した福地茂雄氏をはじめとする経済界の第一線で活躍する偉大な経済人が多く輩出されています。

「はい。その歴史とネットワークは本当にありがたくて、瓊林会というしっかりとした同窓会組織が仲立ちとなって、実務経験豊かな方々を講師としてお迎えして自分の将来像を意識するためのカリキュラムもあります。就職活動に入る前に、先輩がたのアドバイスを受けられるのは貴重なチャンス。もっとも、彼らがその金言の重みを実感するのは、社会に出てからなのかもしれません」。

カリキュラム改革で新しいコース設定に

来年度からはコースが変わるとお聞きしました。

「カリキュラム改革で平成二十六年度から六コースが四コースになります。時代に合った能力を養うための改革で、以前よりもさらにグローバルな視野の育成を意識したカリキュラムになります。海外はもとより、実際ここ長崎で就職するにしても、自社の商品を海外に売り出す、あるいは工場が海外に設けられるなど世界との接点は確実に増えています。グローバルな視野は、社会で必要とされる基礎力の一つでもあります」。

理念である、「時代の要請にあった実践的エコノミスト」が、こうして誕生するんですね。

経済学部の海外研修派遣先
（交渉中の大学を含む）

イギリス	ポーツマス大学 リージェント大学
イタリア	カフォスカリヴェネチア大学
オランダ	ライデン大学
フランス	ヨーロピアンビジネススクール・パリ校
ベルギー	ゲント大学
アメリカ	カリフォルニア州立大学サンバーナディーノ校
中国	西南財経大学 上海財経大学
韓国	中央大学校
タイ	チェンマイ大学

現在の6コースを平成26年度から4コースに再編統合

- 経済と政策コース
- グローバル経済コース
- ファイナンスコース
- 経営と会計コース

※総合経済コース（夜間主コース）はそのまま

昨年のイタリア短期研修のようす。

こちらはアメリカでの短期研修。

実践体験型の「PBL」学習

デイサービス施設広報イベント

経済学部での学びを実社会で活かすトレーニングとして、平成二十三年度から始まったのが、この実践体験型のPBL※。長崎の企業や店舗の協力を得て、ゼミの学生グループがその企業や店舗の運営の企画段階から入り課題や問題を抽出して、それを解決するまでを学ばせてもらうという、大学と企業の共同作業。離島の風力発電関連企業や地元の重工業など協力してくださる企業は年々増えており、今年度はなんと六ヵ所の企業や店舗で十五グループが活動しています。例えば、あるデイサービス施設に入ったグループは、その施設のケアの質がとても高いのにも関わらずPRが不足していると感じ、一般向けの広報イベントを企画しました。また、あるグループは郊外の飲食店で地元の食材を使った新メニューを作ることに。どのプロジェクトも四月のマーケティング調査や関係者インタビューから始まり、企画立案や改善案など約十ヵ月かけて取り組みます。担当教員の一人、津留崎和義准教授は語ります。「このゼミを始めた当初は改善案をプレゼンテーションして終わり、つまり言うだけだったのですが、今年からは案を自分たちが実行、その結果をふまえて最終報告します。失敗も成功も糧にして、より現実的な提案をしようと。私のゼミでは九州大学など他大学とのコラボレーションも行って、さらに広がりをもたせています」。

※PBL Problem Based Learningの略で課題解決型学習。

地元の食材を使った新メニュー

初めての就活名刺「ハツメイシ」

新しい風を
チームに吹かせます

長崎 太郎
Nagasaki Taro

長崎大学 経済学部
経済・経営情報コース
津留崎ゼミ 実践体験型 PBL
サッカー部

Mail：taro.nagasaki@gmail.com
Phone：090-1234-5678

私はこれまで多くのリーダーを経験してきました。その中で、メンバーひとりひとりを観察し、チーム全体を見渡す力を鍛えてきました。メンバーの能力を引き出し、それを如何なく発揮できる役割を与えることで、チームに新しい風を吹かせます。
（長崎太郎）

ながさき百景「風頭公園」

長崎マーチング委員会は長崎の就活生を応援します

ながさきマーチング委員会の水彩画シリーズ「ながさき百景」を使った就活名刺「ハツメイシ」の企画も、今年度のあるグループの発案。そのなかの一人、島崎景子さんによれば「0次ES（エントリーシート）というキャッチフレーズもみんなで考えました。試作品を自分の就活で使ってみて、改良も重ねたんですよ」。より効果的な自己PRをしようと、名刺を発注に来た学生といっしょにコピーを考え、練り上げます。そのかいあって地元紙でも大きく取り上げられました。

経済学部 卒業生による キャリア授業

経済学部の大きな特徴として、瓊林会というしっかりとした同窓会組織の存在があげられます。その瓊林会が全面協力し、卒業生によるオムニバス方式の講義が行われています。中央省庁職員、新聞社社員、酒造メーカーの支社長といった方々が、それぞれの現場のエピソードにからめて職業意識や学生のうちに身に付けておくべき知識や常識など、さまざまなテーマで講演します。担当の藤田渉教授（就職委員長）にお話を聞きました。

「学部一〇〇周年を機に、わが国超一流企業の社長・会長によるトップセミナーが行われたのがきっかけですが、キャリア教育として講義が単位化されたのは数年前です。我々教員が観念的に説明するより、実務経験のある卒業生が語る方が生々しい。一・二年生にとってはまだ就職は火星か木星の話のように遠いけれど、三年生になり実際に就活を始めると、その内容に全身が総毛立つ思いをすることもあるようですよ」。

この日は親和銀行の人事担当である山口大輔氏の講義。「入社後数年で、いきなり仕事に生きがいを感じることはまずない」「採用時、学生側はバイト経験をアピールするけれど、企業側はそのバイトを通じて何を得たか、どう意識に反映されたかを見るのです」とリアルなコメントもビシバシ。しかしこのプログラムはその後が面白い！　講義終了後、瓊林会館に場所を変えて希望者を集めた座談会を開催し、近い距離で本音の意見を聞くことができます。「面接でどういう学生に魅かれますか？」という質問には「志望動機に大きな差は出ません。大学時代に自分で頑張ってきたことを自分の言葉で端的にアピールできる人はいいですね」。

「僕は体育会系の部活の先輩やバイトの店主から厳しい指導を受けたことが、社会に出てから役に立っています。楽しい事ばかりではなく、大学時代に厳しさのなかにあえて飛び込み、身をおくことも大切だと思いますよ」。先輩だからこその愛ある一言は、まさに金言なのです。

講堂で行われたキャリアデザイン授業の一コマ。質問も活発に飛び交いました。下は座談会のようす。

経済学部の著名な卒業生

宮脇雅俊さん	十八銀行頭取、瓊林会会長
福地茂雄さん	アサヒグループホールディングス相談役、NHK前会長
中村法道さん	長崎県知事
本村忠廣さん	長崎新聞社社長
佐藤洋二さん	双日社長
宮内憲悟さん	SMBCファイナンスサービス顧問
田中健一さん	岡三証券社長

各種ガイダンスと手厚い就職活動支援

学生にとっては、大学で何を学ぶかの次に、出口、つまり就職活動支援も重要な関心事です。教授推薦での応募機会が比較的多い理系に比べ、経済学部は自由応募ということもあり、就活支援が活発です。年間三十本以上の各種ガイダンス、複数のキャリアカウンセラーによる個別支援もあります。就職率は平成二十四年は九十五・六％とここ数年九十％台をキープしているのです。実は、本誌裏表紙にキャンパスの写真を連載している沖田夏樹さんもそのカウンセラーの一人。「ハローワークのようなカウンター形式の就活コーナーを売りにする大学もありますが、こちらではじっくり時間をかけた個別カウンセリングを重視します。バランスの良い学生や個性のとがった学生など、個々の特性に合わせたアドバイスで、時間はかかっても、最終的に自分が納得のいく結果が得られます」。個性に合わせたいろいろなチャンネルを用意することで、サポートしていきます。

「“答え”を押し付けるのではなく、学生自身が自分の問題を発見し、受け入れ、自分で課題に“応え”ていくプロセスを支援します」と沖田さん。